

平和への願い

香川県 竹原 曾 蔵

私は瀬戸内海に浮ぶ小さな島、小豆島の農家の長男として生れ、弟妹六人の兄弟でした。農家と言っても、小さな島で、農地も少なく生活は決して楽ではありませんでした。本土に行くには船で往き来しなければならず、今日のようなフェリーなどはなく、本土とはかけ離れた生活でした。

それが戦後壺井栄の「二十四の瞳」の小説、映画で有名な島となり、観光地としてにぎわいを見せ、今日に至っています。そして私はこの島の小学校を卒業してから、地元の農協に勤めておりました。

昭和十九（一九四四）年三月、徴兵検査で第一乙種合格でした。しかし同年十月十日には繰り上げ徴集で丸亀の連隊に入隊となりました。当時は既に太平洋戦争も我が国にとっては戦雲急をつけ

る情勢となり、十月二十日には急遽外地に行くこととなりました。出発は隠密裡に行動せよとのことで、家族と面会することも出来ず、丸亀連隊の営門を午前二時に出発し、博多港より船に乗り朝鮮の釜山に上陸しました。そして列車で満支国境の山海関を通過し、中支のウースンに到着しまして現地の部隊に編成されたのです。編入された部隊名も今では忘れてしまい記憶もなく分かりません。

そして約六カ月の初年兵教育を現地で受けました。ここで一人前の兵隊となり、部隊は海南島へ転進することとなり、上海港から輸送船で南シナ海を渡り台湾沖まで航行して行つたのですが、敵の潜水艦や飛行機が待ち受けているとの情報が入り、船団は引き返すこととなり、再び上海に戻ったのです。

そして当分輸送船の航行は危険だということで、部隊は杭州に駐屯して米軍の上陸作戦に対抗する戦闘訓練を始めました。同時に義島の街の警備に

着いていました。この部隊には四国の高知、九州の久留米、それに東北などの混成部隊でした。

ある日のこと、分哨についていますと警備地の北方一キロ地点の小高い山に八路軍が来襲、かなり多勢の敵兵の様子だったので、早速本部に通報しました。敵はチエコ機銃で襲撃してきたのです。また時々迫撃砲を打ち込んできます。

我が軍はこれに反撃して激戦となりました。三時間ぐらいの戦闘が続き、我が軍には数十人の戦死傷者が出ました。私は幸いというか無事だったので、負傷した戦友を二人で担架で後方に運んできました。

昭和二十年八月十五日、日本は連合国に対して無条件降伏となりました。我々は杭州に集結して武装解除を受け捕虜収容所にて昭和二十一年四月まで、土工作業の使役に出てゆきました。

復員は昭和二十一年四月三日に復員船にて博多港に上陸し、懐かしの我が家に帰ることが出来ました。上陸して車中から見た本土の都市は、ほと

んどが空襲で破壊され見る影もなかったので心配しましたが、我が郷里は無傷で安心しました。

しばらく休養の後、元の農協に勤務することになり、五十八歳で定年退職し、今日に至っております。

短い期間の軍隊生活でしたが戦争の悲惨さ、そしてあの労苦は計り知れないものでした。戦後新しい日本となり、既に六十二年にもなり、今日のようにな何不自由なく安心して暮らせるようになり、この平和な時代を恒久に持ち続けたいものです。これからの日本を背負ってくれる若い方たちよ！どうかこの平和の尊さを大切にして下さい。それが戦争の労苦を味わった者たちの痛切な願いです。